
ONな世界

幸有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONな世界

【Nコード】

N2257L

【作者名】

幸有

【あらすじ】

近未来に完成する体験型ONLINEゲームでのお話の予定だったのですが・・・

異世界迷い込みのお話にシフトします。

やっぱりチートな主人公を描いてみたかったので。

バグにより主人公のステータスがチート仕様になり・・・。

プロローグから4話まではこのお話の設定です。

5話からは異世界でチートなんだけど人間臭い主人公に仕上げてい

ければと。

処女作ですのでご指摘などあればどしどしご連絡ください。

ブログ

みなさん、はじめまして。幸有です。

広大な世界観を表現できたらいいなあゝ^^

ONな世界

今日待ちに待った【新世界ONLINE】のヘルメットが漸くとどいた。

「抽選に当たってから一体どれだけ待たせるんだよ・・・」

このぼやきも当然だ。なにせこのゲームは発売前から人氣が途轍もなく、販売自体も抽選での販売だったのだが、初版限定一人に対して78万人もの応募があったのだ。

しかも、販売前日にアップデートが決まっていまい、問い合わせが殺到したため
発送が2週間近く遅れてしまったらしい。

「まあ、とりあえず説明書でも読んでみますか・・・」

表面に張ってあった【お詫び】の紙を丸めてゴミ箱に投げ捨て、俺は早速説明書を

取り出した。

説明書

新世界ONLINEへようこそ

このゲームはあなた自身をネットの新世界へいざなう
いままでとは違う体験型ONLINEゲームです。

送付いたしましたヘルメットをかぶって頂き、
そのまま横たわるだけでゲームはスタートします。

あとはガイドがゲーム内にて説明しますので
まずは新世界にダイブしてみてください。

終わり

・・・えっ？

これで終わり？

まずはやってみろって随分いい加減な説明だな。

まあやってみるけどさ・・・。

人体への影響はないみたいだし、プレイ時間も一日最大三時間まで・

・

これなら何かあっても大丈夫でしょ。

じゃあこのばかでかいヘルメットかぶって・・・

いざ、ダイブ!!

第1話

ONな世界 1話

目をあけると目の前に僕がいた。

「・・・ん？」

目の前の僕は目をつぶっていて何も着ていない。
最初は鏡かと思ったが、動かないところをみるとそうではないらしい。

少し手を広げた状態で足は地面と接しておらず、少し浮いている。
速度は遅いがくるくると回っているようだ。

何だろう？と思っていると頭の中から声が響いてきた。

「はじめまして。私はこの世界を案内するナビゲーターです。
これよりこのゲームの操作説明と、あなたが動かすプレイヤーの
設定を行います。

よろしければ了解の旨を、声に出してお答えください。」

うわっ吃驚した！

いきなり声が頭の中に響いてきたよ！

そういう仕様なのかな・・・とりあえず答えてみる。

「はい。大丈夫です。」

「では、説明を始めます。まず最初にあなたが操作するプレイヤーの外見を

変更します。目の前にいるのはあなた自身の姿です。

変更できるのは、肌の色、目の色、髪の色、髪の長さになります。

なおこの変更によってあなたの種族が決定します。

種族は27種族あります。

種族が決定するとその種族に応じたパーツが身体に付与されあなたのステータスが決定します。」

説明が終わると、目の前に自分が映し出された、パソコンの画面のようなものが浮かんできた。

「おわっ！」

思わず声が出てしまった。誰も見ていないがなんか恥ずかしい。

宙に浮かんでいる画面を見ると、そこには色の分布が表された図が表示されていた。

「それでは目の色を決めてください。画面に映し出されている色に触ると

あなたの目の前にいる自分の姿が変化します。」

目の前にいる僕を見ると、ゆっくりと目を開けた。

画面の赤っぽい色を触ってみると僕の目の前の僕の眼の色が赤っぽく変化した。

「うーん・・・なんか違うな・・・」

次に黒っぽい色の辺りを触ると黒に変化する。

「・・・これでいいか。」

声を出すとナビゲーターの声が聞こえてきた。

「これでよろしいですね？」

はい。と答えると、次に髪の色、肌の色、髪の長さを決めていった。すべて本当の自分に沿った色にすることにした。

「あなたの種族は・・・・・・・・・・になりました。」

え？なんて言った？

全く聞こえなかったんだけど。

まあ、なんでもいいや。

「はいはい。なんでもいいですよ」

「これであなたの種族が決定されました。
次に操作説明です。」

~~~~~

~~~~~

今日はこれくらいにしておこう。
小説を書くって難しいなあ・・

2話

ONな世界 2話

「次は操作説明です。」

ナビゲーターがそう言い終わると同時に目の前にいた自分が自分のほうに歩いてきた。

身体を動かそうと思ったが身体が金縛りにあつたように動かない。すーっと溶け込むように、自分と自分が重なると僕はもう一人の自分になった。

手足を動かしてみる・・・いつもと変わらない。

僕はこれで漸くゲームのキャラクターになったようだ。

するとナビゲーターが話し出した。

「体に違和感はありませんか？」

何らかの違和感を感じた場合は右肩を3回叩いてください。

これはゲームを行う上でとても重要な動作になります。

これを行うと強制的に肉体と精神が分離され、真上から自分のキャラクターを

見るような状態になり、同時にナビゲーターと会話ができるようになります。

ログアウトする際もこの動作を行ってログアウトするので覚えていてください。

戦闘中はこの動作をおこなっても何も起こらないので注意してください。

それでは自分の右肩を三回叩いてみてください。」

僕は自分の右肩を三回叩いてみる。

（おおっ！）

先ほどの説明通りに自分自身を真上から見ているような状態になった。

「また肉体に戻る際は手元にある画面を操作してログインしてください。」

説明通りに眼前にあるパソコンな画面のような画面のログインのボタンを

押してみた。

今度は自分の体がすーっともう一人の自分に近づいていく。

重なったと同時に視点がもう一人の自分と重なる。

「これでログアウトとログインの説明は終わりです。
なおプレイ時間の3時間を過ぎますと強制的にこの状態になります。

この場合はどんな場合でも強制的にログアウトしてしまうので

ご注意ください。

次に体の動かし方の説明に入りますがよろしいですか？」

ぼくはそのまま、はい、お願いします。と答えた。

「では転移しますのでそのままお待ちください。」

ナビゲーターが言ったあと目の前の景色が大きく歪み始め、強い光を感じたあと

大きな岩が一つだけある、地平線が見えるほどの広さの草原に僕は立っていた。

何も着ていないことを思い出し、すぐに自分の体をみると、麻でできたような

シャツとなにか動物の皮でできたようなズボン、素材のよく分からないサンダルのない

様な靴を履いていた。

そして腰には大ぶりの短剣がホルダーに刺さっていた。

わけがわからないでいるとナビゲーターが説明を始めた。

「今装着しているものはすべて私からのプレゼントになります。

初期装備ですが冒険を進めていくと、様々な装備がありますので、ご自身で見つけてください。

それでは身体を自由に動かしてみてください。」

そう言われて僕はまず、思いっきりジャンプしてみた。

ドン！という音がなり僕はものすごい高さのジャンプをした。
地面には小さなクレーターができています。

「なんだこれっ！！！」

うわっ！すげー高い！！超怖い！！！！」

空中でジタバタしているとそのまま僕はお尻で着地した。

「いたた・・・くない？」

思わず痛いと言いつうになつたが少しも痛みを感じなかつたので僕はとても

不思議に感じていると、ナビゲーターの声が聞こえた。

「左肩を2回叩くと目の前にウインドウが開きます。

自分のステータスをみたり、自由に道具を出したりしまつたりすることが出来ます。

道具は自分の所有するものであれば自由にこのアイテムボックス
に出し入れすることができ、

ほぼ無限に収容可能です。

ただし、自分が持ち上げられないものや特殊なアイテムは収納できません。」

先ほどの僕のとんでもないジャンプがなかったようにナビゲーターは説明を始めた。

「道具のしまい方は左肩を2回叩いたあと、ウィンドウの表示されている状態のまま、

しまう道具を持ち上げてください。

そのまま道具がアイテムボックスの中に移動されます。

道具を出す際はウィンドウ内でアイテムを選択すると目の前に具現化します。

なお、戦闘中はこのウィンドウは開きませんので、戦闘中に使う道具などはあらかじめ

具現化しておいてください。

それではアイテムボックスの中にある飲み物を具現化してみてください。」

さっきのジャンプは何だったんだろう？と思いながらも僕は左肩を2回叩き、ウィンドウを開いた。

~~~~~

なかなか本編に入れない。

どうしようか・・・

まだプロローグみたいなもんだしなあ・・・

### 3話

#### ONな世界

僕が左肩を2回叩くと目の前に半透明なウィンドウが開いた。

ステータス、アイテムボックス、アビリティ・・・

そのほかにも色々書いてあるが、ナビゲーターの指示通り、まずはアイテムボックスを指先で押してみる。

するとウィンドウが移り変わり、アイテムボックスの中身が表示された。

一番上にビン（水1？）と書かれ、左側に小さな水の入ったビンが表示されている。

「これかな・・・」

と僕は呟きつつウィンドウの中の水の入った瓶を触ってみた。

ポンっという小さな音とともに、半透明なウィンドウの向こうには水がなみなみと入った透明なビンが具現化していた。

「具現化できたようですね。このゲーム内では実際に食べ物を食べたり、

水を飲んだりできます。

味覚を含む人間の五感はすべて感じる事が出来ませんが、お腹が空



いたり、  
のどが渴いたりすることはありません。

娯楽の一つとして、このゲームでは食事を楽しむことができますので、

世界各地の様々な食べ物を探してみてください。

ウィンドウの右上にある【×】を押すとウィンドウは閉じる事が出来ます。」

ナビゲーターが言い終わると同時に僕はウィンドウを閉じた。  
早く足元に具現化したビンの水を飲んでみたかったのだ。

栓を抜き水を飲んでみると、よく冷えていてとてもおいしかった。

味覚やのど越しまで見事に表現されており、ここがゲームの世界かどうか

分からなくなるほどだった。

「それでは最後にあなたの種族とその特性を説明します。」

おっとそうだった。僕はまだ自分の種族を確認していなかった。

「あなたの種族は【人間】です。

人間は大きな特色はありませんが、すべての種族の特性を使える可能性を

持っています。

ただし、能力値が熟練するまではとても低いので最初は苦勞する

かもしれません。

「が、努力次第では英雄にもなれます。」

僕は思わずうん．．．と唸ってしまった。

（せっかくのゲームなのに普通の人間になってしまった・・・）

どうせなら竜とか悪魔とかがよかつたなあゝ・・・）

だが、ウィンドウを開いて自分のステータスを確認すると、思いもよらない表示に僕は目を疑った。

~~~~~

まだ本編に入れない・・・。

次話からかな。

4話

ONな世界

ウィンドウを開け、ステータスをを確認する。

「えっ!？」

確かに種族は【人間】で間違いない。

ただ、その横にLvと書いてあるのだがその数字が【0】となっているのだ。

まったく意味がわからない。

ほかにも力、早さ、魔力、その他もろもろのステータスがすべて0になっている。

いや、すべてではなかった。

運だけが4だった。

「え?なんで運だけ4?。意味分かんないし!!」

誰もいないのに思わず叫んでしまった。

おそらく僕は今顔が真っ赤っかになっているだろう。超恥ずかしい。

ただこれはどういうことなのだろうか。

単なるバグか?

さっきジャンプしたときにあり得ないほど高く跳んだのは何か関係が？

ナビゲーターが何か説明していたが、パニックだった僕はとにかくおろおろしていた。

とにかくステータスと自分の動きをもう一度確認してみよう。
ゆっくりと深呼吸をして心を落ち着かせた。

（ものすごくリアルだけどこれはゲームなんだ。）

そう考えると随分楽になった。
最悪リセットすればいいか……

何事もないようにナビゲーターは説明を続けようとしたが……

「それでは……そそ……それで……

ががががが……ぴーーーーー！ーーーー！！！！！！」

うわっ！！！！壊れた！！！！！！

どうしよう！！！！どうしよう！！！！

僕は更にわけがわからなくなり大声で叫んでしまった。

「助……て！！！！わー……ー……！！！！！！」

ONな世界は真っ白に染まった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

次回からこそ本編に入ります。

## 5話（前書き）

なんだかぐだぐだになってしまった・・・

## 5話

### ONな世界 5話

「すい・・・だい・・・か？」

女性の声がうつすらと聞こえ、しきりに肩を揺らされた。せっかくいい気分で寝てたのに・・・

って違う!!

ゲームをしている最中だった!!

跳び起きて周りを見渡す。

「ここは・・・？」

さっきゲームが壊れる前にいた草原のようだが・・・  
僕が呟くと後ろからナビゲーターの声が聞こえる。

「ここは、サラハ平原ですよ。こんなところで寝ていると  
野獣に襲われますよ？」

野獣？っていうか後ろから声が聞こえる???

振り向くと耳の先が尖がった金髪のものすごくきれいな女性が中腰で、  
呆れた顔をしながら僕を見ていた。

「・・・????・・・?????」

思わず僕はその耳の尖った女性を触ろうとした。

「何をするんですか!」

ものすごく嫌そうな顔をしながら女性は後ずさる。  
僕は急に我に返り、謝った。

「あ・・・ごめんなさい。・・・あれ?ここはゲームの中ですよ?  
あなたはナビゲーターさん?」

「何の話ですか?私はアテナと言います。ゲーム?ナビゲーター?」  
アテナと名乗る女性はとても不思議そうな顔をしながらこちらを見ていた。

「・・・ゲームをやってて、壊れたと思ったらここにいたんですけど。」

ここは・・・ってええええええ!!マジでええええええ!!

これゲームですよね?」

とにかくわけがわからないので僕は大声で聞き直してしまった。

「ここはサラハ平原のほぼ中央。あそこに見えるのが大きな岩がエルフィンロック。」

エルフ族の聖地ですよ?



私も巡礼の途中で、ここに寝ているあなたを見つけたので声をかけたのですが・・・」

女性はますます怪訝な顔をしながらも、説明してくれた。

[illegible]

とりあえず僕は大きく深呼吸をした。

まずは落ち着かなければならない。・・・そうだ。思い出した！

僕は自分の左肩を2回、トントンと叩いてみた。

するとフォンという音とともに僕の目の前にはウィンドウが表示される。

「何をしているんですか？ 肩でも痛むのですか？」

女性は少し困ったような顔をしながら僕に訪ねてきた。

「やっぱりゲームじゃないですか。あゝ吃驚した。」

だますなんて酷いですよ。ほら、ウィンドウも出るし。」

僕は安心してながらウィンドウを指さしながら彼女に説明する。

「ここに何かあるんですか？」

女性は不思議そうに僕の足元を見ていた。

[illegible]

~~~~~

異世界にシフト完了。

主人公の名前決めてないな・・・
次回はチートな感じをだせればと。

ノリで書いているので予定は未定です。

6話

ONな世界 6話

「もしかしてこのウィンドウ見えてないですか？」

ウィンドウを指さしながら僕が尋ねると、女性は更に不思議そうに何もないことを確認している。

「・・・見えてないみたいだね。」

女性には、ウィンドウが本当に見えていないらしい。もしこれが女性の演技だったらアカデミー賞ものだ。とりあえずウィンドウを閉じた。

ここで僕はもう一度一息ついて、現状について仮説を立ててみる事にする。

（ウィンドウが見えないってことは、この女性はノンプレイヤーキャラクターなのかな？

そもそもあまりこのゲームの説明って受けてないからあんまりよくわからないんだよね・・・

他人のウィンドウは見れない可能性はあるけどウィンドウそのものも知らないようだし・・・

そうだ！一回ログアウトしてみればはっきりするかな。

確か・・・右肩を三回叩くんだったかな。）

自分の右肩を三回叩いてみる。

トントントン・・・・・・・・

・・・・・・・・

もう一度三回叩いてみた。

パンパンパン・・・・・・・・何も起こらない。

バシバシバシ・・・・・・・・肩が痛い・・・・。

複雑な顔をしながら何度も肩を叩いている僕をみて女性は心底心配
そうな顔をして

尋ねてきた。

「先ほどからしきりに肩を叩いてますが痛むのですか？

怪我でもされているなら私の魔術で直しますよ??？」

女性がずっと目を閉じると、女性の掌が淡い緑色の光に包まれた。
そのままその手を僕の肩にあてがう。

先ほど強く叩きすぎてじんじんしていた肩の痛みがずっと消え、ほ
のかに温かく、
なんとも安らぐような感覚になった。

「どうですか？痛みはとれました？」

女性はにっこりと微笑みながら僕の目を見ている。

「・・・ありがとうございます。」

・・・これって魔法ですか？初めて体験しました。」

僕はわけもわからずとりあえずお礼を言った。

「私達エルフ族は魔術と呼んでいます。」

風の精霊の加護により扱えるようになります。」

あなたはエルフ族ではなさそうですが、私達の種族と似ていますね。

失礼ですがあなたの種族は？」

やっぱりこの女性はエルフなんだと思いながら僕は答えた。

「僕は【人間】という種族みたいです。」

というか普通の人間だと思えます。」

「【人間】ですか？聞いたことがないですね。」

エルフは長命なので、私も長い間生きていますが、はじめて聞きました。

村の長老は知っているかもしれないですが・・・。」

本当に知らないような困った顔つきでエルフの女性は言った。

僕はさらに混乱した。

人間を知らない？

というよりもあなたも人間でしょ？

そこまでキャラクターになりきらなくても・・・

「え？あなたも日本人ですよ？

こうして日本語を喋ってるわけだし。

たしかに見た目はエルフですが、これはゲームでああなたの種族が
エルフだから

エルフなんですよ？」

支離滅裂だ。自分でも何を言っているかわからない。

エルフの女性は何も言わず、じっと僕をみていたが、なにやら思い
ついたように

僕にこう言った。

「ここで話していても話が進みませんね。

あなたの言っていることもよくわかりませんし・・・。

私の村でゆっくり話しませんか？

きっと長老も力になってくれると思います。」

僕は、わかりました。と答え、よくわからないまま、先に歩いてい
くエルフの女性の
後について行った。

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

チートっぷり発揮できず。。

次回こそは!!

ノリで書いているので予定は未定です。

## 7話（前書き）

ユニークアクセスが500を超えました。  
人に読んでもらうって凄く嬉しいですね。

あとはコメントも貰えるのもっと嬉しいです。



## 7話

ONな世界 7話

しばらく歩いているとある重要なことに気がついた。  
そういえばこのゲームの最大ログイン時間は3時間・・・

3時間など、とうに過ぎてしまっている。  
これはどういうことだ？

しかもお腹もすいてきたし、喉も渴いてきた。

ただ不思議なことにかかなりの時間、それもかなりの速さで歩いているのだが

僕自身、全く疲れを感じていない。

そんなことを考えながら歩いていると、突然エルフの女性が立ち止まり、小声で話しかけてきた。

「どうもあの辺りに少々厄介な魔獣がいるようです。

あの魔獣は魔術の耐性がとても高く、苦手なんです。

少し数が多いですね・・・

迂回しますので余り大きな音を立てずについてきてもらえますか？」

どうやら魔獣がいるらしい。しかもエルフの女性が指す方向を見てみると

1匹ではなく5匹程いる。

遠目だとはつきりとは分からないが大きな蛇のように見える。

エルフの女性は口の前に人差し指を立て、シィと言って僕に確認した後、

ついてくるよう促した。

そんな矢先、僕はお約束のように枝を踏んでしまい、バキッという音がなってしまった。

枝の折れる音はそれほど大きくなかったのだが、僕が思わず「ひゃあっ」と言っ

てしまったため、あの魔獣達に気づかれてしまったようだ。

しゅるしゅるという音を立てながら魔獣が近づいてくる。

「応戦します！」

エルフの女性は腰に提げていたレイピアのような剣を抜くと僕の前に立ち塞がる様に魔獣と対峙した。

とても戦える気はしなかったが僕もなんとなく腰にあった大型のナイフを抜いておいた。

「私が戦っている間、危険ですので少し離れていてください。

1、2、3で私が突撃します。

行きますよ。1・・・2・・・3!!」

エルフの女性はそういうと同時に魔獣に斬りかかった。舞いを踊るような見事な剣さばきに僕は見とれてしまっていた。

「一匹そちらに行きました!逃げてください!!」

エルフの女性がそう言うと同時にひと際大きな蛇が僕に向かって大きな口を広げている。

エルフの女性に見とれていた僕は、回避行動が遅れてしまった。

「うわぁ!!」

思わず僕は左腕で顔を覆ってしまった。

やられたと思ったがまったく痛くない。

確かに魔獣の鋭い牙は僕の左腕を噛もうとしているが、皮膚の表面で止まっている。

「へ?」

僕は間拔けな声を出してしまった。

魔獣も何度も僕に噛みつきようとしているが、文字通り全く歯が立っていない。

僕は右手に持ったナイフで思い切り魔獣を斬りつけた。

ザシュツという音ともに魔獣は真っ二つになる。

それどころか魔獣の向こう側の地面にまで亀裂が走った。

魔獣はピクピクしながら僕の左腕から剥がれ落ちるように地面に落ち、死に絶えた。

・  
・  
・  
心臓がバクバク言ってる。

・  
・  
・  
本当に死ぬかと思った。

腰が抜けてしまい僕はその場にへたり込んでしまった。

よくわからないがとにかく魔獣を倒したようだ。

呆けているとエルフの女性が残りの魔獣を倒し終え、走って近づいてくる。

「大丈夫……みたいです。」

すいませんでした。1匹そちらに逃げてしまつて。

でもお強いようですね。

あなたのこと、戦えないと思ってました。」

正直なところ、本当に死ぬかと思ったが、僕は苦笑いをして腰を抜かしたまま彼女にサムズアップした。

サムズアップした左手は恐怖でぶるぶると震えていた。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

戦闘描写難しい。本当はもっとチートな感じを出したかった……

ノリで書いているので予定は未定です。

## 8話

### ONな世界 8話

わからないことが多すぎる・・・

戦闘を終えて安心した後、初めての感想がそれだった。  
はたしてこの世界は本当にゲームの世界なのか？

魔獣と戦って怪我もなく生き残れたことは感謝しているが、僕は確かにあの蛇の魔獣に  
噛まれたはずだ。

あの大きさの蛇に噛まれたにも関わらず、僕は蚊に刺されたほどの  
傷すら残っていなかった。

それどころか、一撃であの大きな蛇を両断してしまった。

地面に亀裂を残すというおまけまで残して。

ただ、あの魔獣を両断したときの生々しい感触、血の匂い。  
呆けていなければ僕は吐いていたかもしれない。

冷静になって考えてみると改めて寒気がした。

「あの・・・少し聞いてもいいですか？」

僕が歩きながらエルフの女性に尋ねると女性は歩きながら顔だけ振

り返った。

「なんででしょうか？村まではあと少しですよ。」

「いえ・・・違うんです。」

僕は今までこのゲームで起きたことを事細かにエルフの女性に話した。

そして捲し立てる様にエルフの女性に聞いてみた。

彼女はずっと黙って僕の話聞いていた。

「ここはどこなんですか？

ゲームの中なんですか？あなたはプレイヤーなんですか？

それともここは現実なんですか？

僕は解らないんです。

ここが現実なのか、そうでないのかすらわからないんです。」

僕は泣いていた。一気にいろんなことを話して感情が昂ぶってしまったらしい。

エルフの女性は蹲って泣いている僕に、優しく抱擁をしながらやさしい口調で話し始めた。

「大丈夫ですよ。大丈夫。

もう少しで村に着きます。

今のお話、村の長老の前でもう一度していただけますか？私にも判らないことが多すぎるんです。

ですが一つだけ言えることはここは間違いなく【現実】です。」

エルフの女性は僕を頭を撫でながら静かに言った。

僕は現実だということ知り、しばらく泣き続けてしまった。

「そうですか・・・【現実】ですか・・・。」

僕はそう言い終えると涙を拭って凜とエルフの女性を見た。

「泣いてばかりいちや格好悪いですね。」

でも少しすっきりしました。本当にありがとうございます。

ここが【現実】であることは間違いないみたいです。

もう大丈夫です。」

僕は現状を受け入れることにした。

どうやらここはゲームの中ではないようだ。【現実】だ。

俄かに信じがたい部分も沢山ある。

だが受け入れてしまわなければ心が壊れてしましそうだった。

「もうすぐ村に着きます。」

もう日が暮れてきたので少し急ぎましょう。

お話は私の家でまたゆっくり聞かせてください。」

そう言い終わるとエルフの女性は僕の手を取って歩き出した。



僕は覚悟しなければいけないのかもしれない。  
この世界で生きていくことを。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

少し重たくなってしまった。

ノリで書いているので予定は未定です。

## 9 話（前書き）

ユニークアクセスが1000を超えました。  
本当にありがとうございます。

## 9話

ONな世界 9話

太陽が沈み始めた頃、漸くエルフの村に到着した。

村自体の規模はそれほど大きくなくエルフの女性の話では300人程のエルフが

住んでいるらしい。

各々の家では夕飯の用意をしているのか、夕餉の匂いがする。

村の中でもひと際大きいこの家が長老の家のようにだ。

「ここが長老の家です。

さあ、あがってください。どうぞ。」

家の中に入ると、天井近くに光る丸い物体が浮いていた。  
光の精霊を使役しているとのこと、それ自体は一般的らしい。

「この人が私のおばあちゃん、この村の長老です。」

おばあちゃんというには余りにも若々しい見た目だ。  
せいぜい20代後半くらいにしか見えない。

「アテナ。この方は？」

エルフ族ではないようだが・・・？」

突然の来客に少しだけ戸惑っている様子だった。

「あ・・・どうもはじめまして。

スギタ 杉田 コウキ 幸喜といいます。

コウキと呼んでください。

あとでゆっくり説明しますが種族は【人間】です。」

僕は自己紹介した後、ここまでの経緯をアテナさんと一緒に説明をした。

どうやらアテナさんの祖母はいくつか思い当たる事がある様だった。

「そうでしたか。それは大変でしたね。

後ほど、私の知っている限りのことはお話しましょう。

ただお腹も空いているでしょうから、まずは夕飯にしましょうか。

アテナ。手伝っておくれ。」

そう言うのアテナさんと一緒に部屋の奥へと行ってしまった。

僕は一人になり、ぼんやりと天井を見つめていた。

（僕はどうなってしまったんだろう。

小説なんかでよくある異世界にでも来てしまったんだろうか。

でもそう考えるのが一番しっくりくるな・・・。

道中に出会った魔獣や魔術・・・。

どう考えても地球じゃあり得ないことばかりだもんな・・・)

そんな事を考えながらぼーっとしていると夕飯が出来上がったよう

だ。

「コウキさん。できましたよ。」

お腹減ってますよね？ お口に合うかどうか分かりませんが  
食事にしましょう。

沢山召し上がってくださいね。」

アテナさんがにこにこしながら、おいしそうな香りのする肉を焼いたものや

サラダのようなもの、パンなどを次々と運んできた。

どんな食材が使われているのか全く分からなかったが、このおいしそうな香りと

空腹には抗うことができず、僕は次々と口に運んでいった。

どの料理もとても美味しく、なんだか実家にいるような温かな味がした。

僕は思わず涙を零しそうになったが、にこにこ僕を見ている二人に、ただ

「とても美味しいです。」とだけ答えた。

この二人には感謝してもしきれない。

特にアテナさんは素性のわからない僕をここまで連れてきてくれ、更には食事まで

用意してくれた。

空いている部屋があるとのこととで部屋まで貸してもらえようだ。

僕は好意に甘えることにした。

この恩は絶対に返そうと心に決め、目の前の食事を平らげていった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

なんだかとても普通な話になってしまった。  
でもやっと主人公の名前が登場です。

ノリで書いているので予定は未定です。

## 10話（前書き）

やっと10話です。

時間があればもう少し更新したいのですが…  
なかなか難しいもんです。

## 10話

### ONな世界

食事が終わると、アテナの祖母はとある儀式を行うために  
コウキを奥の部屋に案内した。

部屋は薄暗く、2脚のの椅子とテーブルが置かれている。

だんだん目が慣れてくると天井には小さな明かりが無数にあることがわかった。

アテナの祖母の話では、この小さな明かりは魔力の結晶らしい。

幻想的な星空の下にこのような錯覚に陥ってしまうほど、綺麗な明かりだった。

アテナの祖母はゆっくりと聞きやすい声で僕に説明し始めた。

この世界に住むものは世界から>称号<というものを生まれたときから

与えられており、その称号を見るための部屋がこの部屋なのだそう  
だ。

特に儀式自体は危ないものではないので安心して良いと言われた。

アテナの祖母はこれを生業という。魔術に精通し、極めて限られた  
一部の者しか>称号<を

読み取る事はできないのだという。



自分のことを知るには、＞称号＜を知ることが一番の近道と考えられており、＞称号＜を知ることができるのだそうだ。

僕はそんなものが本当に自分に与えられているのかどうか不安に思ったが、アテナの祖母の

「自分のことが知りたいのだろう？」という問いに力強く「はい」と答えた。

確かに、自分に与えられた＞称号＜とやらを知ることができれば、何故僕がここにいるのか  
が判るかもしれないと思ったからだ。

アテナの祖母は一通りこの儀式についての説明を終えると、静かにするようコウキに言った。

アテナの祖母が椅子に座ったまま目を瞑り、両手を僕のほうへゆっくりとかざすと

僕の周りを螺旋状に連なった光の文字が包んだ。

光の文字はゆっくりと動き出し、次第に動きを早めるとだんだんと僕のちょうど

胸の前辺りに収束し始めた。

光の文字は明滅しながら意味ある形へ整列していく。

見たこともない文字だが僕はなぜかその文字を理解することができた。

文字の内容はこうだった。

『世界が愛でし者』

世界はお前を愛する。世界はお前に与する。

世界を理解せよ。世界を感じよ。

お前の望みは世界の望み。

世界はお前にすべてを授ける。

何故だかわからないが僕は涙を流していた。

痛いわけでも、悲しいわけでもない。勝手に涙が流れていたのだ。

光の文字がゆっくりと拡散していくと、先ほどまで小さな光だった  
無数の天井の光が

力強く光だし、部屋を煌々と照らしだした。

光に包まれ、まるで光に抱かれているようだった。

しばらくすると次第に光はに小さくなっていき、部屋の天井は入っ  
た時と同じように

星空のような小さな明かりが灯っていた。

部屋を出ると、笑顔のアテナが待っていた。

アテナにどうでしたか？と聞かれたが僕はうん。としか答えること  
ができなかった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

更新遅くなりました。

平日はなかなか書く時間が無いですね。

がんばって一日一話を目標にしたいと思います。

## 11話（前書き）

10話と11話を大幅に修正しました。  
半分寝ながら書く物語が破綻しますね。  
次からは気をつけます。

## 11話

### ONな世界 11話

部屋から出ると僕はあることに気付いた。

いつもと景色が違って見えるのだ。部屋のあちこちにガスの塊のようなものがある。

いくつも見える。

僕はそれを触ってみようと手を伸ばしたが、そのガスの塊を触るところはできなかった。

何の感触もなく手がガスの塊を通り抜けただけだ。

アテナに聞いてみると、そのガスの塊のようなのはマナというらしい。

大気中にある魔力をマナと呼んでいるとのことだった。

アテナが言うにはマナには色があり、色はそれぞれ属性を表しているらしい。

属性は大まかに分けて6つ。

赤は火

青是水

黄は土

緑は風

黒は精神

白は肉体

アテナもアテナの祖母も魔力は十分に持っており、この世界に生きる種族の中では特にマナとの相性が良い種族であるが、色をもつマナは1色か2色しか認識できないとのことだ。

アテナは緑色のマナと相性が良く、緑色のマナだけは認識できるようだ。

アテナの祖母は黒と白の2色を認識できるらしい。

1色でもマナの色が認識できれば、とてもマナと相性が良いということをおアテナは自慢げに教えてくれた。

僕は周りを見渡すと様々な色のマナを認識することができた。

それは6色だけでなく、酔ってしまう程様々な色を認識することができた。

それをアテナに伝えるとアテナは僕が嘘をついていると思ったようだ。

本当であることを伝えるとアテナの祖母もとても吃驚していた。

この世界の種族でもマナの色を認識できない種族もの方が多いそうだ。

エルフ族以上にマナの色を認識できる種族がいるという話は聞いたことがないらしい。

魔術はあらゆる場面で用いられているが、そのほとんどは自分の魔力を使って魔術を

使っている。

だがマナの色が認識できる場合、自分の魔力を使わなくても、そのマナを用いて魔術を発動することができるらしい。

実際、アテナも風を用いた魔術を使用するときはマナを使って魔術を発動しているのだそうだ。

緑色のマナを認識できるアテナは、風と相性がとても良い。

一つ気を付けなければならないのは、基本の6色以外のマナだ。相反する属性を組み合わされた色のマナは、本来の色の持つ属性とは全く異なる属性を持つことがあるので注意する必要があるとの事だった。

一般に知られている属性だと、相反する火と水を掛け合わせた属性、即ち赤と青を混ぜた色、

紫は毒を表すのだという。

精神と肉体の色、白と黒を混ぜ合わせた色、灰色は死の属性だ。

すべてを丁寧にアテナの祖母は教えてくれた。

アテナの祖母は僕をはじめに見たとき、僕は真っ白なマナに包まれていたらしい。

どうやら僕が魔物と戦ったとき、その白いマナのおかげで傷一つ負うことなくいられたのだ。

肉体そのものが純粹に強化されていたということなのだろう。

一通り教えてもらった後、今度は実際に魔術の使い方を教えてもら

おうと

僕はアテナの祖母にお願いをした。

しかし、マリアの祖母は静かに首を振った。

「今日はもう遅いから明日にしましょう。」

窓の外を見ると外は白み始めていた。

僕は苦笑いをし、ごめんなさいと謝ると、ベッドのある貸してもらった部屋に向かった。

~~~~~

かなり修正をしました。

説明が多すぎてわかりにくかもしれない…
難しいなあ。。。

ノリで書いているので予定は未定です。

12話

ONな世界 12話

寝室に入り一人になると、僕は改めて考えていた。

やっぱり僕は異世界に来たんだな…

元の世界に帰る手段も判らないし、これからどうしようか…

はっきり言って途方に暮れていた。

幸い、魔術に関しては並々ならぬ才能があるらしいので、それを使って生活を

していくことができそうだ。

いつまでもここで世話になるわけにもいかないし。

まずは最低限生活できる程度のお金を稼ぐ手段を考えなきゃ…

またお世話になることになるけど、魔術の使い方覚えなきゃならないな。

おそらく僕がこの世界で生きていくには、魔術が絶対的に必要になると思う。

いずれは旅でもして、元の世界に帰る方法も探さなきゃいけないし。

まだこの世界に来てから一日も経っていないんだよなあ。

運よくアテナに出会えたから良かったものの一人だったらのたれ死んでたな。

アテナには本当に感謝だ。

僕がもし地球で見知らぬ人が困っていても多分助けたりしない。
ましてや素性も判らぬ輩などほうっておくだろう。

恩返し：しなきゃ：

やはりなれないことの連続で疲れていたのだろう
強烈な睡魔が僕を襲いそのまま僕は眠ってしまった。

気がつくと僕はアテナに起こされていた。

昨日のことがすべて夢だったなどということは無いみたいだ。

おいしい朝食を頂いた後、僕は包み隠さず、地球のこと、ゲームのこと、

僕自身のことをアテナとアテナの祖母に話した。

そうしなければいけない気がした。

二人とも始めは疑っていたようだった。

僕が真剣に二人に話し続ると漸く信じてくれたらしい。

まあ実際こんな話を信じろと言われてもなかなかすぐに信じるのは
難しいと思う。

信じてくれたことにまずは感謝しなきゃな：

一通り話した後、僕はこの世界で生きていく上で必ず必要になって
いくと思われる

魔法を教えてくれるよう二人にお願いした。

二人は快諾し、早速魔術の使い方を教えて貰うことになった。

まず、昨日話してくれた話の続きから教えてくれた。

この世界で魔術を発動する為に必要なエネルギー源となるものは、自分の魔力、

または色を認識できるマナを使用するという事。

色の認識できるマナは世界に呼び掛ける事によって自由に集める事が出来るらしい。

ただし、その土地の属性によって集まる量が変わるらしい。

あまり多数の色が認識できる者がいないため定かではないとのことだが…

自分の魔力は自由に色を変換できるということ。

これも個人や種族によって得手、不得手があるとのことだ。

そしてマナは色の変換はできないが、他の色のマナと混ぜる事が出来るということ。

ただし、これは2色以上のマナが認識できるものしか混ぜる事が出来ず、この世界には

その技法を使えるものは僅かしかないらしい。

アテナの祖母（名前は先ほど知ったが、ルシアさんという）は混ぜる事が可能だが属性が『死』のため、あまり使用したことがないのだが。

そして一番重要なのが、魔術の使い方だ。

基本的には属性と魔術の効力を明確に意識すれば魔術は発動する。

だが使用するマナ、もしくは魔力の量が魔術の効力に対して下回っている場合は

魔術は発動せず、魔力は霧散してしまいうらしい。

かといって膨大な魔力を魔術に注ぎ込むと効力以上に注ぎ込まれた魔力はこれも霧散してしまう。

効力と魔力量は魔術を使っていつて感覚で覚えるしか手段がないため、効率よく

魔術を使うためにはそれなりのセンスが必要なのだ。

マナを集める方法は、世界に対して呼びかけを行うことで集める事が出来る。

ただしこれも所謂慣れが必要で、集めたマナを自分が使うために固定するのはちょっとしたコツが必要なのだ。

世界に対して呼びかけを行うことでマナを集め、マナに対して呼びかけを行うことで

マナを魔術に変換することができるのだそうだ。

習うより慣れろということで、僕は外に出て早速魔術の練習をすることにした。

アテナさんが近くで見えてくれるそうなので安心だ。

恩返しを早くするためにも、早く魔法の使い方を覚えなきゃいけない。

僕は気合を入れて、アテナさんと一緒に森へ出かけることにした。

~~~~~

最近忙しくて更新が未定になりそうです。

土日には書けるよう頑張っていきたいと思います。

ノリで書いているので予定は未定です。

## 13話

ONな世界 13話

僕とアテナさんは村から少し離れた森の中にいた。

魔術の練習をするために民家のある村から少しだけ離れた場所まで移動したのだ。

やや開けた場所までいくと二人は足をとめた。

「じゃあこの辺りで練習をしましょうか。

それではまず、基本の魔術から…」

アテナさんはそういうと、掌の上に10センチ程の小さな火球を作りだし、空中にゆらゆらと滞留させている。

その火球を正面の大きな木に投げつける様にしてぶつけた。

ボンっという音を出して火球は弾け、大きな木の幹に直径50センチ程の焦げ跡を作った。

「今のは自分の魔力を使って発動した火の魔術ですね。

火というのは形や温度を想像しやすいので、発動が楽なんです。

まずは自分の魔力を感じ取る訓練をしてみましょう。

コウキさんは自分の魔力の波動はわかりますか？」

そう言われたがはつきり言って自分の魔力の波動など見当もつかなかった。

だがなんとなく先ほどの火の球をイメージし、掌に意思を集中すると体の力が吸われていくような感覚になった。

そして手に平の上に先ほどアテナさんが作ったような火球がゆらゆらと出来上がった。

しかし、大きさかなりの違いがある。

僕の掌に出来上がった火球はおよそ1メートル程の大きさまでどんどん大きくなっていった。

しかも段々大きくなっていつている。

「これやばいですよね…僕は熱くないんですけど、凄く怖いんです…」

そう言ってる間にも火球はどんどん大きさを増して、すでに僕の体より大きい。

「魔力を入れすぎです!!空に向かって投げるか霧散するようにイメージして下さい。」

アテナさんが焦ったように言っているので僕は慌てて霧散するようにイメージする。

すると僕の掌の上にあった火球は赤く色のついたマナに一瞬で変化し霧散していった。

今度は10センチ程の大きさの火球を明確にイメージして掌の上に作る。

間違いなく10センチ程の大きさの火球が出来上がり、ゆらゆらと浮かんでいた。

僕は嬉しくなって、少しアレンジを試みようと思った。

火球の温度をもっと上げていくイメージを浮かべ、火球に向かって集中する。

すると火球は普通の炎の色から少しずつ赤みを増していき、更に集

中し温度を上げるよう  
イメージすると、白っぽいような色の火球に変化した。

ひょいという感じで先ほどアテナさんが火球をぶつけた木に向かって投げると、僕の火球は

木を焦がさず、そのまま木を貫通し、着地した瞬間にかなり大きな火柱を上げた。

火柱を上げた後の地面自体も蒸発しかなりの深さの穴をあけて煙を上げている。

僕は一瞬で体中から冷や汗を噴出した。これはシャレにならない。  
アテナさんも哑然として、何やら口をパクパクさせている。

僕は途轍もない疲労感に襲われ、強烈な貧血のように状態で立っていることもできず

その場に蹲ってしまった。

それをみたアテナさんは我を取り戻し僕に駆け寄ってきた。

「魔力の使いすぎです！！。あの火球にどれだけの魔力を注いだんですか！？

あの様な火球の魔術は見たこともないです！」

少し興奮するように僕に言っていたが、気分が悪くてそれどころではなかった。

眩暈をがするのを我慢して立ち上がろうとするが足腰が利かない。

「魔力を使いすぎると、最悪意識を失ったりしますよ。自分の魔力量がわからない間は

あまり大きな魔術は使わない方がですね。」



……もっと早く言って欲しかった。

確かに遊び心が出てしまったとはいえ、初めての魔術でこんなことになるとは思いもしなかった。  
これからは気をつけなきゃな。

「少し休ませてください…」

僕は地面にへたり込んだまま、力なく答えた。

5分程休んでいると、漸く貧血の様な症状が治ってきた。  
身体の奥の方のけだるい感じは残ってはいるが…

魔力ってどうやったら回復できるんだろう？と思っていると、大気中のマナが僕に周りに集まってきた。

「ん？」

集まったと思った瞬間に色とりどりのマナが僕の体の中に入っている。  
く。

しばらくすると、先ほどのけだるい感じが抜けていた。

「なんかマナが僕の魔力を回復してくれたみたいなんですけど？？」

僕はわけも判らずそう呟くとアテナさんが答えてくれた。

「確かにいくつもの色のマナをを認識できるコウキさんならあり得るかもしれないですね。」

私も風のマナを吸収できますから。

普通はそんなにすぐに回復するようなものではないんですが…。  
やっぱりコウキさんは規格外のようですね。」

アテナさんじつと考察するように顎に手を添えて考えていた。

アテナさんの言うとおり僕はやっぱり相当に規格外なのかな。  
どんなゲームでも魔力が自然回復するのは時間がかかるもんだしな  
あ…。

なんだかどんどん人間離れしていく自分が怖くなってきた。これっ  
て凄いチートじゃない？  
魔力をほぼ無限に使えるってことだよね？？

「あのこれって普通じゃ…ないみたいですね。」

凄い勢いでアテナさんに睨まれたので言い淀んでしまった。

「コウキさんは多分自分の魔力を使って魔術を発動させるよりも、  
マナを使って魔術を使った方が  
いいかもしれません。」

普通はマナの使える量や属性は限られるのですが、コウキさんは  
ほぼすべてのマナを認識できる  
ようですから。

じゃあ今度はマナで魔術を発動してみましよう。  
まずは私が風のマナを集めますね。見ていてください。」

そういうとアテナさんはすっと目を閉じた。  
するとアテナさんの周りに緑色のマナが集まってくるのが見える。

「どうですか？私の周りに風のマナが集まってくるのがわかりますか？

今私は世界に呼び掛けて、風のマナを集めています。

この集まった風のマナに呼び掛けて魔術を発動します。」

すっと目を開けてアテナさんが手を前へかざすと木が倒れんばかりの強い風が吹いた。

「ここは風のマナの多い場所ですので風のマナは集めやすいんです。コウキさんも風のマナなら集めやすいと思いますよ。」

「じゃあ僕もアテナさんが認識できるように風のマナを集めてみますね。」

僕は眼を瞑り意識を集中した。

緑色のマナが集まるようにイメージしてゆっくりと目を開けてみる。すると先ほどアテナさんが集めた風のマナの量とは段違いの量のマナが僕の周りに集まっていた。

「えっと…これはどうしたらいいんでしょう？？」

あまりにも膨大な量のマナが集まってしまったため、僕は少しだけ怖くなっていた。

「発動する魔術のイメージを明確にすればそれ以上の魔術は発動しません。

使わなかったマナは霧散するので、大丈夫です！」

それを聞いた僕は扇風機をイメージして、魔術を発動した。  
僕の掌からそよ風がふわ〜とでたあと、ほとんど消費されなかつた膨大なマナはあっという間に  
大気に霧散していった。

~~~~~

最近忙しくて更新が未定になりそうです。

土日には書けるよう頑張っていきたいと思います。

ノリで書いているので予定は未定です。

14話

ONな世界 14話

一度魔術をマナによって発動させた後は非常に楽だった。

後は応用だけなのである。言ってしまうえば明確に魔術を頭の中でイメージさえできれば、いとも簡単に魔術は発動する。

それも先ほど試した風のマナを使った魔術に限らず、水、火、土についても

それぞれ簡単に発動できた。

ひよっとして僕は魔術の才能あるかもしれない。

ただ魔術の明確なイメージを持つために、マナを集めた後目瞑ってイメージを

固めないと失敗する事が多かった。必要以上に大きな魔術が発動されたり、

きちんと発動されなかったりした。

本来であれば自分で発動した魔術に名前を付けるとイメージが固まり、大きな

ぶれがなく発動しやすいのだそうだ。ただし、これには難点がある。

……恥ずかしいのだ。

思い切って《ファイアアロー》と唱えながら火の魔術を発動してみた。

僕が今までゲームなどで見たり、使用したことのあるイメージ通りの魔術が

発動したのだが、アテナさんと二人しかないこの場所で、更には

大木に向かって魔術の名前を叫ぶのは殊更恥ずかしかった。

心なしかアテナさんも笑いを堪えているような気がする。

実際のところは、アテナは笑っているところかとても感心していた。

これほどまでにマナと相性がよく、魔術に明確なイメージを持って発動できる術者はそうそういない。

アテナでさえ、魔術を使いだしたころはきちんと発動などしなかった。

初心者は魔術の規模が自分のイメージより小さくなってしまうのがほとんどなのだ。

その点、集めるマナの量といい、魔術の質といいコウキは天才と言っているほどの上達ぶりである。

本人も面白がって様々な魔術を使い始めている。

アテナが見たこともないような魔術も色々と使っていた。たとえば雷の魔術。

この魔術はコウキにとってはゲームの中などでよく見かけ珍しくはない。

しかしアテナの様なこの世界の者にとってはとても珍しいのだ。

コウキは雷の魔術は水のマナと風のマナを混ぜて使っている。

混ぜるだけであれば魔力をもつ者であればほとんど誰でもできるのだがこの雷の魔術を

使用する者はコウキ以外にはこの世界にはいないだろう。

何故なら科学のあまり発達していないこの世界では雷の発生する原

理が確立されて
いないからだ。

コウキはもちろん知っている。

雷の発生原理は上空の水分（水）同士が擦れ合った時に生まれる静電気が膨大な量になったものが雷である。これを知らないで雷という魔術は発動しないのだ。

誰でも静電気は身近に感じたことがあり、知っているが雷と静電気が本来は同じもの
ということが想像しにくいいため、雷の魔術を使用する妨げになっている。

実際コウキがアテナにこの説明をすると、小規模ではあるがアテナも雷の魔術を
使用することができた。

この世界の魔術はコウキにとって、無限の可能性を持っている。
何故ならコウキのいた世界にはゲームや小説などの中には魔法は存在し、容易に
イメージすることができからだ。更には火や雷などの発生原理なども知っているため、
コウキが見たことのある自然現象についてはほぼすべて魔術で再現する事が出来るのだ。
試してはいないが台風や地震などもおそらく再現可能だろう。

今、コウキが面白がって試している魔術はこの世界の最先端の魔術よりも大分先をいつている。

しかもコウキは自分の魔力をほとんど使用していない。

マナによって魔術を発動しているため疲れすら感じておらず、際限

がない。

コウキは思いつく限りの魔術を試した。

しかし、うまくいかなかった魔術がいくつかある。

まず一つ目が浮遊だ。これはコウキがどう考えても原理が思いつかない。

実際アテナにも聞いてみたが、浮遊の魔術は存在しないようだ。

風の魔術を使って、高いところから飛び降りた際に突風で一時的に身体を浮かして着地する

といった魔術は存在するのだが、ただ浮遊する魔術はないらしい。

二つ目は光、もしくは闇の魔術だ。これも属性自体が見当たらず、マナを集めようと

世界に呼び掛けても当然マナは集まらない。

即ち、自然界には光もしくは闇の属性のマナというものは存在しないようだ。

明かりについては火が代用され、家の明かりなども温度の低い火属性の魔術によって

明かりを供給している。単純に光属性といのはありそうだが無いとのことだった。

三つ目は遠隔魔法である。自分の手から火を飛ばしたり、風を起こしたりすることは

可能なのだが、自分の手、もしくは身体に接していない場所に魔術を発動することは

できなかった。全ての属性においてこれは不可能だった。

どうやら魔力、マナは術者のイメージに密接な関係があり、術者から離れてしまうと

イメージが届かないようなのだ。

それから、しばらくの間コウキは魔術の練習に励んだ。

コウキにとってそれは、とても楽しく充実した時間だったが練習場所の地形や景観が若干、変わってしまったため、ちよつとした自然破壊をした気分だった。

森に向かってごめんなさいと謝り、コウキとアテナは家へと戻っていった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ノリで書いているので予定は未定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2257/>

---

ONな世界

2010年10月9日18時36分発行